

連載 第2回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● メタボリズム運動

1960年代、新進気鋭の建築家たちがメタボリズムという建築運動をおこした。

私が横浜国立大学の建築学科に進級した頃である。

「建築は時間とともに生々流転し変化するもの」とするこの運動の理念は衝撃的であった。

大高正人、菊竹清訓、磯崎新、黒川記章らの新進気鋭の建築家にとって大谷幸夫の理念は頭抜けていたように思う。

京都の国際会議場のコンペ（設計競技）で建築家・大谷幸夫さんの提案が入選し、大谷事務所が実施設計を担当した。この作品は成長を続ける建築がある瞬間にスパッと切断された切断面が表現され、その斬新なデザインは格好良かった。4年生の夏休みから入船町にあった大谷事務所でアルバイトをやらせて貰い、大学卒業後、東中野の4畳半のアパートに引越し、そこから代々木の事務所に通った。初任給は1万3千円だったと記憶している。

彫刻家・イサムノグチと大谷事務所が協同で横浜のこどもの国のランドスケープと東屋を設計し、私はイサムノグチの模型造りを手伝った。富山の問屋団地の模型造りや現場監理を手伝っているうちに京都の国際会議場は竣工し、余剰スタッフの人員整理が行なわれた。

大谷事務所のスタッフだった期間は約1年半ほどで、東京大学・大学院・修士課程に在籍することとなった。人員整理を受け入れたのは、メタボリズム運動の先がなんとなく見えてた気がしたからである。

この建築運動は何だったのだろうか。「当時、都市に急激に人口が流入し、膨張を続ける都市の様相に対し、建築はどう向き合うか」の問いかけに対し、建築家の側からする計画手法の提案に過ぎなかったのではないかな。

高度経済成長に向かう日本資本主義は過剰に設備投資を繰り返し、都市の建築は成長するどころか、スクラップ&ビルドが繰返され、極短命な建築が造られては壊さ



京都国際会議場 コンペ1等入選作品

れるようになった。

建築とは、米国やEU圏を凌ぎ世界最大の土建国家となった日本資本主義の捨て駒でしかなかったのではないかな。貪欲にスクラップ&ビルドを繰返す高度成長期の日本資本主義に対し、メタボリズム運動は有効な反撃の糸口を示すことができたのか。

この頃、私はモダンジャズをよく聞いていた。ビル・エバンスやコルトレーン、MJQ、ジミースミス、マイルス・デビスなどが好きであった。中でも鎮寂としたデビスのトランペットの音色がスクラップ&ビルドを繰返す都市の姿にかぶさっていた。

設計室で大谷先生は「イニシャルコストとランニングコストを考えるように」と口にしていて。竣工後の維持保全のし易さを設計段階で考慮しろとの設計方針の指示である。

その後、摩擦杭が折れて不当沈下した京都の国際会議場を補強・再生し、更に増改築を続け、時代が要求する変化に対応してきたその姿勢は、60年代にメタボリズムの旗を掲げ、その後、変節していった建築家に比して筋が通っている。

1980年代、「スクラップ&ビルドの時代は終わった。」として既存建物の維持管理やメンテナンスこそが建築家の重要課題であると、声を上げた私達の考えは大谷さんの理念の延長線上にあるように思う。

建築家・大谷幸夫の門下生からは、既存建物の維持管理、修繕・改修、再生を手がける建築家が多く輩出している。これは建築が竣工してしまえばそこで終わるのでなく、産み落とされた建物はそこから始まるのだとする大谷さんの建築感に影響されたためだろう。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所主宰。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。